



# 日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

## News Letter

### 日本小児看護学会第18回学術集会を終えて — 近県大学・医療機関のみなさまのご尽力に支えられて —

学会長 浅野みどり  
(名古屋大学)

今年も名古屋は7月下旬から連日35°Cを越す猛暑でした。37°Cという酷暑の中、7月26日(土)～27日(日)名古屋国際会議場で開催致しました第18回学術集会には、1,300名を越す多くの方にご参加いただき、企画委員一同心よりありがたく存じます。

小児病棟の統廃合や小児救急医療の危機が叫ばれる昨今、「多様なニーズに応える小児看護—子どもと家族を取り巻く育児・医療環境の変化の中で—」をメインテーマとして、子どもの健やかな成長発達、子どもの安全、安心できる育児を保障するために小児看護を担う私たちは何ができるのか、予防的な視点を含めて子どもと家族中心の小児看護について、活発にご討議いただきました。参加者総数は1,336名(会員679名、非会員629名、学生28名)と、とくに非会員については予想を大きく上回るご参加をいただきました。一般演題数は、口演107題、示説75題(合計182題)の発表でした。

特別講演では、菱田理氏より「子どもの“心の癒しと社会への自立”」のテーマで、事例を随所に取り上げ説得力のある貴重なお話をうかがいました。また、教育講演「子どもの成長発達と食育—よりよいライフスタイルの確立を目指して—(大関武彦氏)」、シンポジウム「子どもと家族中心の医療を考える」は一般公開(無料)としました。こちらの広報が不十分だった

のか、一般市民のご参加が少なかったことが残念でした。

第17回学術集会(三輪百合子学術集会長)の果敢な挑戦を見習っていくつかのチャレンジをしました。プログラムでは、「チャイルドシート使用と看護師の役割(財団法人小児保健協会の協力)」「新生児心肺蘇生プログラム」「患者・家族会からの発信」の3つのランチパフォーマンスセミナーを実施しました。また、「保育園看護職の役割と実際」「チーム医療における小児看護専門看護師との協働」のテーマセッションで多職種が連携してケア提供するメリットや課題について討議され、「特別支援学校における医療的ケア」では、PTAに「医療的ケアを考える会」を作り親の共通認識を図る学校の例を取り上げて、活発に討議されました。また、上鶴重美先生の実践セミナー「小児看護における看護診断」もたいへん好評でした。

運営では査読のオンライン化、示説ポスター2日間掲示などを取り入れ、心配もありましたが、愛知県だけでなく岐阜・静岡など近県の大学・臨床の方々の多大なご尽力のお陰で盛況な学術集会となり、本当にありがたく存じます。

最後に、来年はアイディア溢れる蝦名美智子先生を学術集会長に札幌で行われる第19回学術集会が盛大に行われますことを今から心待ちにしております。



「患者・家族会からの発信」での患者体験の1コマ



懇親会会場にて；司会の山口桂子先生と

## 第18回学術集会報告 ランチパフォーマンスセミナー『患者・家族会からの発信』

■企画委員 三浦 清世美 (中部大学)

この企画は“多様な社会のニーズに応える小児看護を考えるために、あらためて子どもたちや家族の声を聴きたい”との思いから、浅野みどり学術集會長の強い希望により実現しました。参加募集は、難病の子ども支援全国ネットワークの親の会連絡会と健やか親子21推進協議会参加団体を中心に行いました。司会進行役の福島慎吾さま(難病の子ども支援全国ネットワーク事業部長)には、準備の段階から各会との連絡調整等で大変お世話になりました。発表当日、一番気がかりだったのは発表時間の延長でした。初めて大勢の前で発表される方、あふれんばかりの思いを流暢に話される方、会場の反応をみて進めたいと言われる方。“5分前”と書いた紙を発表内容と発表者の個性(!?)に合わせた時間に提示することで、無事、時間内に終了することができました。発表後には1階の患者・家族会

の展示ブースが大盛況。患者・家族会の方は「予想以上の反響にびっくり!発表前は話しても一方通行だったのに、今は看護師さんからいろいろ質問されるので関心をもってもらえたみたい!」と感激されていました。また、学術集会終了後にいただいたメールには「たくさんの看護師さんに思いを伝え、励まされるうちに“私たち親にしかできないのだから”という驕りが、“私たち親や家族だからできる”という自信に変わったことがうれしい。」と書かれており、胸が熱くなりました。

学会として初の試みであった『患者・家族会からの発信』。患者・家族会の多彩な活動やその活動の源となる体験や思いを知ること、子ども・家族と医療者がパートナーシップを築きながら子どもたちを育むこと、社会みんなで支えあうことの大切さを再確認できた貴重な機会だったのではないかと感じています。

## 日本小児看護学会 第18回学術集会に参加して

■井上 由紀子 (東北大学病院)

学術集会への参加は、教育や臨床の場での種々な課題への取り組みを知ることができ、自分とは違った視点の看護に気づき、学ぶことができる有意義な機会となっている。そのなかで、興味を持っているプログラムの一つがテーマセッションである。一つのテーマについて様々な立場からの意見や考え、活動の実際について聞くことができ、さらに会場とのディスカッションも活発に行われるため、研究発表とはまた違った刺激を受けることができるからである。

私は「チーム医療における小児看護CNSとの協働とは?」というセッションに参加した。近年、CNSに関しては雑誌やメディアで取り上げられるようになり、各分野のCNSの活動を知る機会が増えている。小児看護CNSにおいても学術集会でそのとりくみが紹介されてきたこともありCNSの実践活動は広く理解されるようになってきていると思う。

今回のセッションではCNSが自分の実践を紹介、報告するこれまでのセッションとは異なり、病院でともに働く医療者がCNSをどのようにとらえ、活用しているかという視点での発表だったため、CNSが機能している施設での実践活動の様子から、CNSに期待されていることや課題となっていることが提示されとても興味深かった。

なかでも、最も印象に残っているのは、相互の信頼関係のうえに小児科医師が診療のなかにCNSの機能を組み入れていることであった。対応の難しい子どもと家族のかかわりに相談を受けたり、課題の解決のためにピンポイントでCNSに仕事を依頼しているのではなく、普段の診療で子どもと家族にCNSがかかわりをもつことをシステム化しており、子どもと家族が抱える課題の早期発見やひいては、課題発生の予防的効果もあるのではないかと思った。

CNSが所属する組織や立場によってその活動のスタイルは様々である。子どもと家族へ質の高い看護を提供するためには同僚である看護師にCNSの役割や機能を理解してもらい、お互いに信頼し合い、ともに看護を実践することが必要である。さらに、学術集会のテーマでもある「多様なニーズに応える」ためには多くの医療者のかかわりが必要になる。そのような状況では、看護師だけでなく、他職種との協働は必要不可欠であり、CNSには子どもと家族にかかわる医療者を組織的に主体的にまとめていく役割も求められている。

今後、小児看護を続けていくうえで、以上のような視点を重視し今後の看護にいかしていきたいと思った。

## 日本小児看護学会 第18回学術集会に参加して

■赤川 里美 (名古屋大学医学部附属病院 小児内科病棟)

今回、大学院在学中にお世話になった浅野みどり先生が学術集會長を務められること、また、助手で3年半働いた名古屋大学が主幹校であることから、参加者というだけではなく運営スタッフの一員として本学会に参加しました。日頃、看護研究の必要性は痛感していても、日々の業務に忙殺され、発表できるような研究が行えないジレンマを感じながらも、狭い視野で働いてはいけなさと、できる限りいろいろな学会に参加させていただき他施設の研究成果を聴かせて頂くようにしています。いつもの学会では、抄録から自分に関係のあるセッションや口演・示説などを選び参加しているのですが、本学会では司会という役割があり、2日間、同じ会場にとどまるという、いつもとは違った参加スタイルをとることとなりました。2日目の実践セミナーの看護診断やテーマセッションの欧州のプレパレーションについては、私にとって身近なものであり、実践に

結びつくお話であったなと感じています。それ以外に、今回は、1日目のテーマセッション保育園看護職について、2日目ランチパフォーマンスセミナーの開業医でのチャイルドシート使用に対する働きかけ、テーマセッションの特別支援学校における医療的ケアについて聴かせて頂いたことが、今私がいる看護の世界を大きく押し広げてくれたように感じました。地域での働きといても訪問看護ぐらいしか感じたことがなかったのですが、看護とはありとあらゆる場所で行われているのだと実感させていただきました。そのような仕事ができる喜び、大きな責任を感じることとなった貴重な学術集会でした。このような機会を与えていただきました皆様に感謝いたします。また、今後非力ながら看護の発展の一旦を担って行けるよう努力していきたいと思っております。

## 小児救急看護認定看護師と小児救急看護学科のご紹介

日本看護協会看護研修学校 小児救急看護学科専任教員 白石 裕子

小児看護に携わっている看護師の中に「小児救急看護認定看護師」に興味を持っている方も増えてきていることと思います。平成16年、日本看護協会は認定看護分野として小児救急看護を分野特定し、平成17年より日本看護協会看護研修学校認定看護師教育課程においてその教育を開始しました。教育開始から4年目を迎えた現在では、62名の小児救急看護認定看護師(以下、認定看護師をCNとする)が誕生し現場で活躍しております。

「小児救急看護」という名前から連想してこの分野のCNは第三次救急の小児患者に対応するCNであると思われがちであるが、決してそうではありません。小児医療をめぐるさまざまな要因がある中、救急外来を受診する小児患者やその家族への対応が社会問題となっており、患児・家族の幅広いニーズに対応していくことができる看護師が必要とされ、この分野のCNの誕生につながったのです。

それゆえ小児救急看護CNには幅広い能力が求められますがそれらは大きく、1. 大半が1次救急の患児が占める救急外来において、緊急度の高い患児を見極める能力、2. 救命救急処置を含めた救急外来に必要な適切なケアが提供できる能力、3. 電話相談への対応も含め、育児不安に対応し家庭における育児力の向上に対する社会資源となりうる能力、4. 増え続ける子どもの虐待に対応する能力、の4点です。学科のカリキュラムにはこれらの能力を身につけるための構成になっており、それ

はただ単に知識・技術を習得するというのではなく、多面的に物事を捉える力や考える力、応用力などを養える内容であるといえます。

看護研修学校における認定看護師教育は1年間の研修コースです。コースの研修生たちは1年間に810時間のカリキュラムを修めることとなります(詳細は日本看護協会のHPを参照; <http://www.nurse.or.jp/nursing/education/nintei/gakka.cgi?code=13>)。4月に入学した研修生たちは、それぞれの職場で働きながら通信教育により看護論や看護過程を学び、6月から11月末までの6か月間は、看護研修学校(東京都清瀬市)において学びます。看護研修学校で過ごす6か月のうち最初の3か月間は講義が中心で、その後演習や臨地実習の準備等を経て9月下旬から5週間の臨地実習に入ります。実習が終わるとその成果をまとめたケースレポートの発表会を行い、研修学校における6か月間の学習が終了します。終了後1月の修了試験を経て、3月に卒業となります。

日本における小児救急医療体制は様々であると同時に研修生たちの所属部署も様々です。救急の医療現場や外来などに勤務している研修生はむしろ少数派で、大半の研修生たちは小児看護に携わる者としてステップアップすることを目標に研修に臨んでいます。今後小児救急看護CNの活動が、小児救急医療の質の向上につながると期待されます。

## 小児救急認定看護師としての学びと活動

■三 浦 英 代 (都立清瀬小児病院)

私は小児専門病院で働く、小児救急看護認定看護師1期生です。小児救急看護認定看護師になりたいと考えた当時、私は10年以上小児科(その当時は新生児病棟でしたが)で働いており、いわゆる「ベテラン」と言われる立場でした。しかし自分では、臨床での経験と日々の学習で身に付けてきた知識はあるけれど、本当に「ベテラン」なのだろうかと思いが持てずにはいません。今後も、小児看護を続けていきたいという気持はありましたが、自分自身の力だけでは学習に限界があるのではないかと、「子どもが好きだから」小児看護を続けるのではなく、自分自身も成長して行く必要があるのではないかと感じ研修学校を受験することに決めました。

小児救急看護認定看護師と聞くと、救急の場面を想像しがちですが、研修学校での講義の内容はクリティカルなものばかりではなく、小児の成長発達や疾患の理解など基本的なことから始まり、プレパレーションや虐待、事故予防、災害看護など幅広い分野について学ぶことが出来ました。認定看護師になるための学校であることから多くの授業は、講義を聴くということだけで授業が終了するというものではなく、講義で学んだことを自分の施設で実施するために、自分は何をすべきかを具体的に考え、文章としてまとめるという作業を経て、授業が終了するというものでした。そのため授業のあとのレポートはとても難しいものでしたが、このような過程を経ることで、自分の施

設に帰ったときの活動の方向性や具体的な取り組み内容を明確にすることが出来ました。

このように書くと「研修学校はとても大変だ」と思われるかもしれませんが、大変なことばかりではありません。研修学校では、同じ道を志す仲間との出会いがあり、仲間とのやり取りでは、授業で得られること以外にも多くのことを学ぶことができました。グループワークでのディスカッションや、休み時間の会話は楽しいだけではなく新しい情報を得る機会でもあり、自分が知らない世界を知ることができ、仲間と接することで自分の視野を広げることができました。そして仲間は、研修学校が終了しても仲間なのです。

今、自分の施設に戻って小児救急現場におけるトリアージについて取り組んでいます。小児の救急外来では多くの軽症の患者様の中に重症の患者様がいるという状況にあり、短い時間でのフィジカルアセスメントや高いコミュニケーション能力が求められます。研修学校で小児看護の基本から学びなおしたことで、根拠に基づいて子どもと家族を見ることができるようになり、そのことにより自分自身の子どもと家族への接し方も変化したように感じます。小児看護の学習は研修学校を卒業して終了するというものではなく、再始動の始まりであり、また学んだ内容は日々の看護の中で生かされ、今後の自分の看護の方向性を見出すものであったといえます。

## 日本小児看護学会 第19回学術集会ご案内

学術集会テーマ：大地の力、子どもの力、語ろう未来—小児看護

2歳半のとき川崎病で入院したヒロシ君は「注射も白衣もきらい。注射した看護婦さんに廊下で会ってハッとした。注射されるってとっさに身構えた。今でも注射のとき、看護婦さんにさわらないで欲しい、と思う」と18歳の今、語っています。

子どもの力を信じて関わったとき、このような子どもがいなくなると思いませんか。この学会がその契機になればと願っています。

【日時】2009年7月18日(土)・19日(日)

【会場】札幌コンベンションセンター(札幌市白石区)

【演題募集期間】2009年1月9日(金)～2月16日(月)

【参加申し込み】事前登録の場合 会員：9,000円 非会員：10,000円

当日参加の場合 会員/非会員：12,000円

学生(大学院生を除く)：3,000円

【学術集会に関する情報】

1. 特別講演：スウェーデンの小児病院における子どもの擁護(仮)

Kristina Silfvenius氏(カロリンスカ大学小児病院Hospital Play Specialist)

2. 教育講演：子どものための療育環境デザイン

千葉大学工学部 准教授 柳澤要氏

3. シンポジウム1、課題別セッション4、交流セッション4、ランチパフォーマンス4を計画しています。また新しい試みですが、学会前夜にプレセミナー4題を企画しました。テーマは本学の教員の協力を得て、未熟児のポジショニング、小児の呼吸リハビリテーション、赤ちゃんマッサージです。またスウェーデンにおけるプレパレーションの実践も予定しています。定員がありますのでホームページをご参照ください。

【事務局】

(学術的問い合わせ) 〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目

札幌医科大学保健医療学部 jschn-19@sapmed.ac.jp

(運営の問い合わせ) 〒063-0802 札幌市西区二十四軒2条7丁目山地二十四軒ビル2F

### 日本小児看護学会九州地区地方会

メインテーマ

病気の子どもを育む家族を支える看護  
—家族と看護職のパートナーシップのあり方について—

● 会期：平成20年10月11日(土)

● 会場：佐賀看護センター

佐賀市久保町大字徳万1997-1

● 実行委員長：幸松 美智子(佐賀大学医学部看護学科)

#### プログラム

☆ 開会式 13:00～13:10

☆ 第一部 特別講演 13:10～15:00

「糖尿病の子どもを育む家族の願い」 岩永 幸三(日本IDDMネットワーク 副理事)

「小児看護の現場で家族理論を活用する—家族エンパワメント理論を用いて—」

佐東 美緒(高知女子大学看護学部講師)

☆ 第二部 分科会 15:10～16:30

第一会場 品川 陽子(大分県立病院小児看護専門看護師)

「小児看護CNSの役割と家族支援の実践 障害をもちながら生きる新生児/乳児と家族への支援」

第二会場 佐東 美緒(高知女子大学看護学部講師)

「低出生体重児を育む家族の抱える問題と支援の実践」

第三会場 幸松 美智子(佐賀大学医学部看護学科准教授)

「慢性疾患を抱える子どもを育む家族と看護職のパートナーシップのあり方」

☆ 参加費 500円

☆ 参加申し込み FAXもしくはE-mail(下記)で受け付けます(E-mailの方はfax内容を送信してください)

● お問い合わせ先 ● 佐賀大学医学部看護学科 〒849-8501 佐賀市鍋島5-1-1

Tel/Fax 0952-34-2553(幸松研究室) E-mail yukimats@cc.saga-u.ac.jp

### 第3回(2009年度)吉武香代子研究助成金

公募締め切りは11月30日(日)です。

公募資格は2008年度の会費を振り込んだ本学会会員であることです。詳しくはホームページをご覧ください。

### 世界看護科学学会(仮称)のお知らせ

本学会も発起団体になっています上記の学術集会が2009年9月19・20日に予定されています。是非ご参加ください。

詳しくは<http://wans.umin.jp/>をご覧ください。

### ◆ 編集後記 ◆

この夏は各地で雷雨豪雨にみまわれました。穏やかな秋の訪れを願わずにいられません。日本小児看護学会ニュースレター33号をお届けします。今回は第18回学術集会の報告、第19回の学術集会の紹介および小児救急認定看護師の紹介をしました。多くの方に関心を持っていただければ幸いです。

今後も会員の皆様のニーズを把握するために学術集会中に行ったアンケートの結果も踏まえ、より良い情報発信を行っていきたく考えます。会員の皆様のご意見ご希望は随時受け付けますので、どうぞ気軽にご連絡ください。

jschn\_koho@yahoo.co.jp

合わせて学会ホームページ<http://jschn.umin.ac.jp> もご覧ください。

#### 広報委員会メンバー

委員長：濱中喜代

委員：三輪百合子、長佳代、田久保由美子

込山洋美、村松久江